

# 平成29年度 学校自己評価システムシート (大妻嵐山中学校・高等学校)

目指す学校像	○「世界につながる科学する心、表現する力」を育てるGlobal Eco Science School ○建学の精神「学芸を修めて人類のために」貢献できる高い意識と学力を身につけた女性を育成する学校 ○大妻コタカ先生の教育理念に基づいた人格の陶冶をめざす学校		学校評価委員会出席者 第三者評価委員 3名 学校関係者評価委員 3名 事務局(教職員) 7名
重点目標	1 世界につながる科学的素養を育てる 2 世界につながる表現する力を育てる 3 世界につながる心と感性を育てる 4 世界につながる進学力を育てる 5 組織的な広報活動を展開し学校の魅力を伝え、入学者を確保する	達成度 Aほぼ達成 (80%以上) B概ね達成 (60%以上) C変化の兆し (40%以上) D不十分 (40%以下)	

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する)は複数設定可。  
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

学校自己評価				学校関係者評価					
年度目標				年度評価					
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	実施日 平成30年 3月17日	学校関係者からの意見・要望・評価等
1・2・3・4	○引き続き中期経営計画に基づき、生徒の学力を向上させる必要がある。 ○生徒の学習姿勢を与えられるのを待つ姿勢から自ら学ぶとする姿勢に変えていく必要がある。 ○学習指導の方法を見直し、生徒の家庭学習時間を増加させる必要がある。 ○新課程開始に伴って英語教育、科学的素養を育む教育を一層充実させる必要がある。	○学力の向上と授業力の向上	○生徒の家庭学習時間を増加させるために「1日1授業→復習の学習サイクル」を徹底した授業を展開する。 ○オンライン英会話の実施を継続し、その対象を中学全体と高校1年に広げる。 ○英語検定の各級の取得率を上げるよう英語科全体で取り組む。 ○生徒の学習意欲向上のために漢字検定、語彙力検定、数学検定を実施する。 ○実験・考察を多く取り入れた理科教育を展開する。 ○科学的素養の土台となる論理的思考力を育むために、新たに言語技術の授業を導入する。 ○アクティブラーニング型授業を全校的に展開する。 ○年間を通したアクティブラーニング研修を継続し、外部への公開授業・研究協議会を実施し、その成果を発信する。 ○授業力向上のために校内公開授業研究を定期的実施する。 ○定期的な教科主任会・学年主任会による学力向上のための情報共有と組織的な取組の目線を合わせる。 ○授業改善のために管理職による授業観察、保護者等への公開授業、生徒の授業評価を実施する。 ○ICTを積極的に活用した授業を展開する。 ○引き続き、海外研修、留学生受入など国際交流・国際理解の取組を積極的に進める。	○生徒の家庭学習時間が増加したか。 ○英語検定の各級の取得率が上がったか。 ○生徒の理数の学力が向上が見られたか。 ○AL型授業が全校展開できたか。 ○生徒の授業評価が良好だったか。 ○外部への公開授業・研究協議会で成果があがったか。 ○ICTを活用した授業が全校的に展開できたか。	○生徒の家庭学習時間は僅かに増加したが、殆どしない割合も3割を超えており、未だに不十分なままにとどまっている。 ○準1級3名 2級52名 準2級229名 3級217名 4級46名 中学2年は、4級取得率100%であった。(2月22日現在) ○生徒の理数の学力は伸びていない。数学においては模試の偏差値と校内の成績の乖離が著しい。 ○河合塾による教員研修を6回/年間実施した。高3以外の全てのクラスで、AL型の授業が行われた。 ○170名を超える来校者を公開授業に参加をした。この日を目標にAL型授業研究し、多くの教員がAL型授業を公開することができた。 ○電子黒板を利用する教員は全学年的に増えてきた。iPadは中1から高1までが、毎日学校に持参している。オンライン英会話やロイロノートでの情報共有など、iPad活用した授業が行われている。	C B D A B C	・引き続き、生徒に負担を掛ける授業、1復習の必要な授業を目指して行く。 ・授業内で、英検対策を行い、さらに取得を学校全体で取り組む。 ・定期考査でそこそこの点数を取ってその後は忘れるという学習のあり方を打破する必要があり。学習が定着して学力に結びつく方策が必要である。 ・授業の進度の心配から、日常的にAL型が実施されてはいない。AL型授業を取り入れた年間計画が必要である。 ・AL型授業への意欲と関心を高めることができた。継続して実施する事で、AL型授業の質を向上させたい。 ・全校的な展開する為には、個人のスキルアップが必要である。教員研修や授業補助が必要である。さらに、通信機器の整備が必要である。		・今後2教科にALの研究委嘱を行い、毎年1回の研究発表会の開催を望みます。 ・ALは重要な方策であるが、一部生徒には重い。個人的フォローアップが必要かもしれない。 ・成績上位と下位では、異なる配慮は難しいが、必要だと思われる。
3	○引き続き大妻コタカ先生の教えに基づいた指導の充実が必要である。 ○生徒がしっかりと挨拶ができるようになる必要がある。 ○一人一人の生徒と向き合っ、嵐山生としての誇りを持たせる必要がある。 ○引き続きSNSの指導を徹底させる必要がある。	○大妻コタカ先生の教えに基づいた生徒の自律心、自主性の育成	○引き続き、生徒に対して大妻精神を徹底し、礼法指導、道徳教育、論語教育を実施する。 ○生徒がしっかりと挨拶ができるために、全教職員が積極的に挨拶を励行する。 ○引き続き、全教職員による身だしなみ指導、時間厳守指導を日常的に行う。 ○生徒の自主性を育むために新たに週番制度を導入する。 ○教員が生徒の良さを見出し、積極的に励ます。 ○他の大妻付属校の生徒会との交流を一層充実させる。 ○引き続き本校のメディアポリシーに基づいた指導を徹底する。	○生徒の挨拶が日常的にしっかりとできるようになったか。 ○週番制度が定着し、生徒が自ら動けるようになってきたか。 ○生徒にメディアポリシーに基づく指導が浸透したか。	○挨拶は日常的に自らするようになっていく。生徒会役員、代表委員会を中心に校内での登下校のあいさつ運動プロジェクトを実施した。生徒からの発信で行ったことで、全校生徒の意識向上に繋がった。 ○週番制度は定着し、自分たちで情報を管理することが出来るようになってきた。2学期は高3、3学期は高2を中心に朝の週番会の進行を行うようになったが、まだ教員の手助けが必要な部分があった。 ○SNSに対する指導は警察(あおぞら)による講話を実施し、また、様々な機会をとらえて指導を行い、生徒の意識喚起を行ってきた。概ね規律を守っているが、理解の浅い生徒も若干いる。	B B B	・引き続き、大妻コタカ先生の教えに基づく人間形成のための教育を一層推し進めていく。 ・SNSの指導は引き続き徹底していく必要があり、保護者と連携してトラブル防止に努めていくが、ICT教育が進む中、本校のSNSの指導についての見直しを考えていく必要がある。 ・来年度も引き続き、生徒の心と感性を育む取組を実施し、校内に落ち着いた雰囲気醸成し出るよう努めていく。		・SNS規制も難しいところはあるが、現時点でも十分であると思う。 ・生徒の良さ、優れているところを褒め、お互いに感心し合う雰囲気醸成したい。
4	○生徒が早期に進路意識を持ち、自らの目標に向かって学ぶ姿勢を身につけさせる必要がある。 ○キャリア教育を系統的、組織的に進める必要がある。 ○大学受験をやり抜く学力をつける必要がある。	○生徒の主体的な進路意識の醸成 ○教員の進路指導力の向上	○進路・学習指導部が司令塔となり、各教科、各学年と連携した組織的な進路指導体制を構築する。 ○模試分析、学力分析を徹底し、生徒が自らの力を客観的に把握できるよう指導する。 ○キャリア教育計画を見直し、中高6年間を見通して、体系化する。 ○大学入学者希望学力評価テストに対する指導方針を策定し、体制を整える。 ○引き続き、ジェネリックスキル測定テストを実施し、生徒の進路意識を高めるとともに指導の効果を検証する。 ○目的を明確にして、計画的な生徒面談を実施する。 ○海外留学・進学を一層進めるために、在学中の支援体制と仕組みを整える。	○組織的な進路指導体制が構築できたか。 ○キャリア教育が体系化でき、充実した実施ができたか。 ○進学実績が向上したか ・難関大学、医学部2名以上 ・国公立20名以上 ・早慶上理40名以上 ・GMARCH40名以上 ○海外留学・進学の仕組みが整えられたか。	○組織的な進路指導体制は構築されつつある。 ○キャリア教育はグローバルセミナーなど新しい取り組みもあり活発化しつつある。体系化については未だ模索中の面がある。 ○進学実績は低下傾向である。また、生徒の実力からして目標が過大である。文部科学省展開の「トビタテ留学Japan」に学校として登録し、情報収集をする。 ○オーストラリアAll Hallows' School、台湾文藻外国語学院と提携し、ターム留学、ギャップ留学のシステムを構築する。今年度は2名の高校2年生が前者に3学期を利用したターム留学に参加している。	B C D B	・新テスト・新しい学力観への対応に向けて、各教科と連携して取り組む必要がある。 ・中学～高校6年間を見通したキャリア教育プランを構築する必要がある。 ・成績上位の生徒の学力を伸ばす必要性。受験勉強の開始を2月まで早める必要性がある。 ・ターム留学やギャップ留学のシステムは構築できたが、通年の留学システムが未構築なため、次年度努力したい。		・受験勉強の開始を早めるためには、教育活動において、さまざまな配慮が必要である。 ・高校に国際交流科を新設し、英語教育の充実を図る。 ・他教科を英語で授業したり、1週間英語づけの生活体験などを考えたい。
5	○地域との連携、特に嵐山町との連携を一層充実させる必要がある。 ○本校の存在、本校の教育活動を広く知らしめるための更なる工夫が必要である。 ○引き続き、地域の中学校・塾との連携を一層深めるために戦略的な工夫を重ねる必要がある。	○工夫・進化した入試広報・生徒募集活動 ○情報発信力の強化	○嵐山町町制施行50周年を契機に町との連携を一層深める活動を新たに作り、本校をアピールする。 ○従来のORキッズ、サイエンスラボの他に地域の小学生対象の取組を工夫する。 ○引き続き、全教職員が目線を合わせ、ぶれない説明ができるようにする。 ○塾・中学校訪問で収集した情報を定期的に分析し、より効果的な生徒募集活動を実施する。 ○学校ホームページ、パンフレットなど発信物の内容を不断に見直す。 ○本校を知ってもらうための情報提供の場を開拓する。 ○本校創立50周年記念に向けて校内組織を設け、関係機関と連携しながら、準備を行う。	○中学50名以上、高校150名以上の入学者が確保できたか。 ○嵐山町との連携が深まったか。 ○全教職員一丸で入試広報、生徒募集ができたか。 ○新たな情報提供の場が開拓できたか。	○中学入学手続者は70名弱、高校入学手続者は100名程度と見込まれる。中学は回復の兆しが見られるが、高校の大幅減については入試広報の早急な見直しが必要である。 ○地域との連携は学童保育のボランティア、スイミーでの理科実験教室、町制50周年嵐山まつりの共同開催などの取り組みでより深まっていると感じる。 ○まだ、生徒募集に危機感を感じていない教職員もいる。 ○情報発信においてはホームページ、紙媒体(学校案内・ちらし)、そして学校長の「はぐくむ」(新聞記事)を効果的に用いた。	C A D A	・高校の生徒募集目標達成が最優先課題と考える。改善策としては中学入試の広報活動と高校入試の広報活動は同様ではない。ターゲット(中学入試:保護者、高校入試:受験生)を認識し、それぞれにあった戦略を立てる。また、高校入試のテクニカルな部分として内申点と偏差値(北辰テスト)の用い方を再検討したい。 ・嵐山町の行事には、今以上に積極的に参加し、地元の中学校として関わりを深めたい。		・高校のアピールポイントも、多数あがるようにしてほしい。 ・在校生と受験生1対1の相談会などを設けてはどうか。 ・嵐山町への貢献度は、極めて大きい。 ・中学校プログラミング入試は、画期的だった。 ・学校長の「はぐくむ」(朝日新聞)は、公立中学校で話題になっており、タイムリーな情報発信になっている。